太宰府人物志

資料室だより④

弘法大師空海と大宰府

弘法大師空海（774～835）は、いうまでもなく真言宗の開祖として有名です。また俗に「お大師さん」と親しみをこめて呼ばれ、各地にさまざまな説話・伝承が残されていることでもよく知られています。

空海は留学僧として、第18次遣唐使の一行とともに延暦23年（804）、中国へと旅立ちました。そして、二年後の大同元年（806）、日本に帰国していますから、折しも今年は空海帰朝から1200年の節目にあたるわけです。

帰国後、空海はしばらくの間、大宰府に滞在していたようです。このことを示す記録は多くはありませんが、そのひとつが大同2年2月21日の日付を含む「田少弐が先妣の忌斎を設くるがための願文」（『遍照発揮性霊集』所収）です。これは空海が大宰少弐田中某（八月麻呂とも）の亡母の忌日にあたって作成したもので、自らもこの法事に参加しています。さらに空海の伝記のひとつである『弘法大師行化記』には、大宰府が観世音寺三綱にあてて出した大同2年4月29日付の文書が収められており、これには唐より帰朝した空海を、入京の日まで観世音寺に止住させることが記されています。つまり、空海は帰国後、観世音寺に留まっていたことが知られるのです。

さてそれでは、空海がいつ入京を許されて大宰府を離れたのかという点については、その伝記の多くは大同2年秋頃とするのですが、これもほかにたしかな記録は残されているわけではありません。むしろ大宰府滞留はもっと長かったのではないかという説があります。空海の書簡を集めた『高野雑筆集』の中に、大宰府の某氏にあてたとみられる書簡が収められており、その一節に「西府にひとたび別れて、今に七年」とみえて、空海が大宰府を去って七年後に書かれたことが知られます。またこの書簡の内容をみると、唐より将来した経論の書写・流布のために紙筆の援助を求めたものであり、空海のこうした働きかけは、弘仁6年（815）ごろからはじまると推測されています。とすれば、空海が大宰府を離れたのは大同4年のこととなり、その大宰府滞留は在唐期間よりも長かったことになります。

～市史資料室　重松　敏彦～